

教育実践報告

異文化交流海外研修の報告 —「ハワイ異文化研修」の事例を通して—

大石 文朗

The Report on the Cross-cultural Exchange Overseas Program in Hawaii

OISHI Fumio

要 旨

本報告書の目的は、2019年度に実施したハワイ異文化研修を振り返り、「本研修のカリキュラム上の位置づけ」、「本研修地の特色」、「本研修の内容」、「おわりに(今後の課題)」という観点から検討し、今後のより良い研修の一助とすることである。

キーワード

海外研修 異文化理解 英語習得

目 次

- I. はじめに
- II. 本研修のカリキュラム上の位置づけ
- III. 本研修地の特色
- IV. 本研修の内容
- V. おわりに(今後の課題)

注

文献

I. はじめに

2019年12月に未知のウィルスである新型コロナウイルスが中国の武漢で初めて患者が見つかり、その後世界中に広がり人々の交流に多大な影響を与えた。特に、海外への往来は制限され、都市によってはロックダウンされる事態となった。これにより、我が国においても、多くの大学の海外研修や留学は取りやめを余儀なくされ、参加人数は激減した。次の図1は、独立行政法人日本学生支援機構が調査したものであるが、2019年度から2020年度にわたり、その極端な落ち込みが見て取れる。

図1. において2019年度に107,346名であった日本人学生留学数が、2020年度には1,487名に落ち込んでいる。本学のハワイ異文化研修は、まさに2019年度に初めて実施した研修プログラムである。具体的には2020年2月23日～3月8日の期間で実施し、かろうじて研修を終えて帰国することができた。我々と入れ替わりに到着した他大学の学生は、研修を途中で切り上げて帰国したと聞いている。その後3年間、ハワイ異文化研修は実施していない。2023年度になって、日米ともに出入国のPCR検査も撤廃され、内外ともにコロナ前の社会に戻そうとする状況の中、永岡文部科学大臣は「新型コロナの影響で減少した海外留学を復活させるため、留学の支援や留学の機

運の醸成に努めたい」と声明を発表した²⁾。このように今後は、日本人学生の海外研修や留学に対するニーズが高まることが予想される。そこでこの報告書は、2019年度に実施したハワイ異文化研修を振り返り、「本研修のカリキュラム上の位置づけ」、「本研修地の特色」、「本研修の内容」、「おわりに(今後の課題)」という観点から検討し、今後のより良い研修の一助とする目的のために執筆したものである。

II. 本研修のカリキュラム上の位置づけ

海外研修に対して我が国では、産学ともに大きな教育効果を期待している。文部科学省は、「高等教育において国際的な交流活動を行う意義」に関して、次のように謳っている。

海外に飛び出し、日本では得がたい様々な経験を積み、多様な価値観を持つ世界中の人々との交流により、異文化理解の促進、アイデンティティの確立、国際的素養の涵養等、グローバル人材の育成に寄与(する)。³⁾

さらに、経団連は次のように言及している。

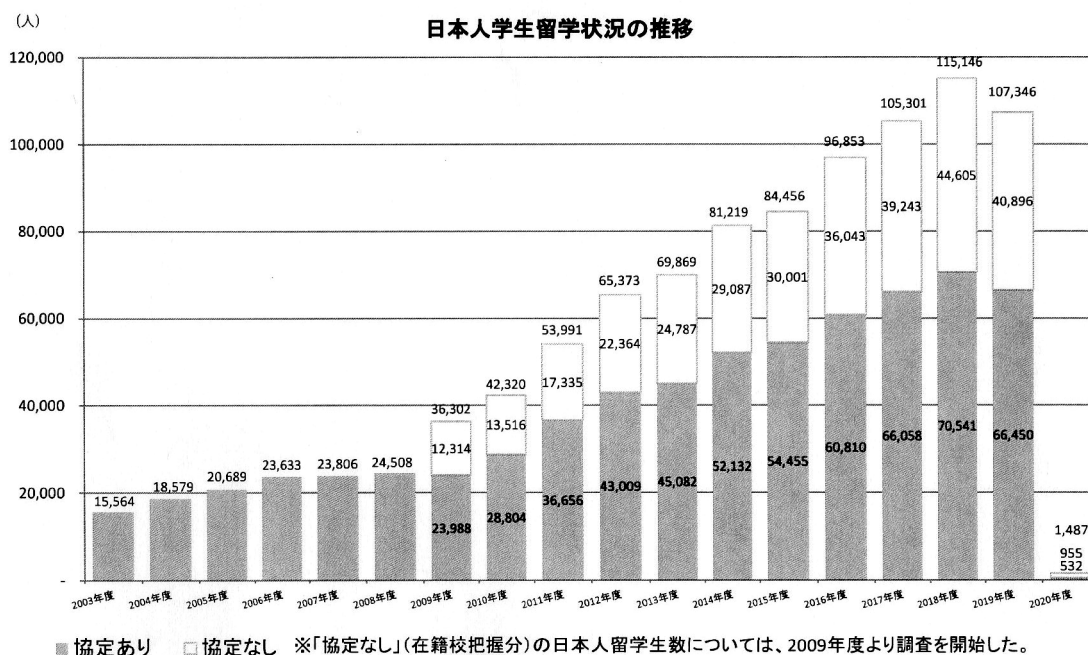


図1. 出所：独立行政法人日本学生支援機構「2020年度日本人学生留学状況結果」¹⁾

外国語によるコミュニケーション能力の向上に加え、異文化への適応力、海外へのチャレンジ精神など、グローバル人材に求められる素質・能力を育成する上で、海外研修は特に有効な手段である。⁴⁾

これらの指摘に共通している点は、海外研修の教育的効果は単に語学の習得だけではなく、異文化の環境に身を置くことによって実際に多様な価値観に触れることにより、全人的な教育が期待されるということだと思われる。それ故、特に短期研修の場合、筆者は異文化理解により重きを置く研修内容に実施意義があるのではなかろうかと思い、本研修では「異文化研修」を教育的な主軸としている。

ハワイ異文化研修は本学教育学部のカリキュラム上、中学校教諭一種(英語)と高等学校教諭一種(英語)の免許取得のための、2年次後期科目の選択必修科目として位置づけられている。ただし、研修ということもあり、2年生を主に対象とするということで、時間割上可能であれば、全学年が参加可能である。両免許の認可を文部科学省へ申請する場合、「教科に関する専門的事項」として、「英語学」、「英語文学」、「英語コミュニケーション」、「異文化理解」の4つの科目群での科目設定が義務づけられている。ハワイ異文化研修は、「異文化理解」の科目群に属しており、「異文化交流海外研修」という2単位科目でカリキュラム上は記載されている。他の「異文化理解」の科目は、次のようなものがある。

1. 異文化理解概論……(免許上、必修科目)
2. 英語圏文化演習Ⅰ(米国)……(免許上、選択科目)
3. 英語圏文化演習Ⅱ(カナダ)……(免許上、選択科目)
4. 国際交流演習……(免許上、選択科目)

「異文化交流海外研修」は、カリキュラム上の流れからすると、必修科目である「異文化理解概論」、もしくは「英語圏文化演習Ⅰ」を履修していることが理想である。なぜならば、異文化に対する造詣をある程度持ち、研修での体験を通して、異文化を五感で感じて理解や認識をより深めるということで教育内容がデザインされているからである。しかし、

それはあくまでも理想であり、海外研修に参加したことにより異文化に対する勉強意欲が触発される場合もあるので、必ずしもそれらの科目を履修していることが研修参加への条件とはしていない。

Ⅲ. 本研修地の特色

①ハワイの人種的多様性

2020年の米国国勢調査によると、米国州全土の「人種的多様性」の指標が、ハワイ州が76%と第1位であった。2位がカリフォルニア州で69%、3位がネバダ州で68%であった。そして、実際のハワイ州の人種構成は次の表1のようである。

表1 ハワイ州の人種構成⁵⁾(筆者が作成)

人種	2020年
アジア系	37.2%
混血	25.3%
白人	22.9%
ハワイアン系	10.8%
黒人	1.6%
ネイティブアメリカン	0.3%
その他	1.9%

米国本土では、平均して白人が全人口の70%を占めている⁶⁾。多文化共生というよりは、同化理論では「アングロ・コンフォーミティ」^{註1)}として知られているが、良くも悪くも白人主流文化への適応が強要される。ハワイ州は、過半数以上を占める主流を形作る人種が存在せず、多人種・多民族が混在しており、まさに多文化共生社会を具現化しているといっても過言ではない社会である。文部科学省が「国際教育の意義と今後の在り方」において、「異なる文化をもつ人々を理解するだけではなく、理解した上で、それらを受容しながら共生することができる力が重要となる」⁷⁾と指摘しているように、我が国が目指すグローバル社会における異文化理解教育の目標を、異なる価値観や人種の違いを認め合い、共生する社会を目指すということであるならば、ハワイは多文化共生社会について学ぶ、理想的な海外研修の場所であると思われる。

②日本人の多くが抱くイメージによるハワイへの誤解

日本人でハワイを知らない人はいないと思われるほど、今も昔も人気のある海外である。渡航先希望地として常に上位に位置している。しかし、実際にハワイを訪れる目的は、観光がほとんどで、その滞在期間は3～4泊が主なものである。2019年のデータによると、89%の日本人が観光目的であった⁸⁾。また、受け入れるハワイ州にとっても観光産業は州の経済を支える基幹産業である。観光客を引きつけるため、日本の旅行社と提携して、観光客を魅了するようなイメージ作りを行ってきたし、これからも行うであろう。しかし、そのイメージは現実と必ずしも一致していないにもかかわらず、訪問客である9割方の日本人が、観光産業が創り出したイメージ通りのハワイを期待して、現地で限られた数日を過ごすことになる。参加する者とサービスを提供する側のウィンウィンの関係でこれらのビジネスが成立しているので、観光におけるハワイというならばそれはそれで良いと思われる。しかし、観光目的以外においても、これら創られたイメージが判断基準になることには苦言を呈しておかなければならない。それゆえ次に、日本人が抱くハワイに対する代表的なイメージを挙げて、それらの実情を検討したい。

1. 楽園
2. 治安が良い
3. 日本語が通じる(特に日系人が多いという心象から論じていく)
4. 日本人の観光客だらけ

「1. 楽園」については、金銭的な余裕を持った観光客にとっては楽園であるということである。観光地としての非日常を味わうため、レストランやショッピング、数々のオブショナルツアーが設けられている。当然それらには金銭的な負担が伴う。ホテルの立地条件や部屋がオーシャンビューなのかマウンテンビューなのかでも料金が異なってくる。レストランもフードコート的なものから高級レストランまで選択可能である。ショッピングは、効率よくお金を使ってもらうために大きなショッピングセンターが用意されている。多くの観光客は、数日間と滞在期間も少ないので、ワイキキやアラモアナショッピング

センターあたりの往来で時間切れとなる。一方、これらの楽園のイメージを維持するために現地の人々は多大な労力を払っている。観光というサービス産業は、不測の事態が起きやすいものである。例えば、フライトやホテルのオーバーブッキング等は特に繁忙期には起きてしまい、その苦情処理に当たらなければならない。また、フライトの遅延などにより夜中に対処しなくてはならないケースも生じる。現地で観光産業に携わっている人々のおかげで、安心・安全な観光ができています。さらに、ハワイの雇用形態は米国式なので、ほとんどの従業員は契約雇用であり、複数の仕事を抱えていることも珍しいことではなく、景気によってはすぐにレイオフされてしまう。現地の人々にとっては、楽園とはほど遠い所かもしれない。

「2. 治安が良い」は、米国本土よりはという条件付きである。観光が基幹産業なので、ハワイ州はかなり治安に関しては気を遣っており、予算を使って対策を講じている。ワイキキには日本の駐在所を模したHonolulu Police Waikiki Beachという交番が、観光客の人通りが一番多いカラカウア通りに設けられている。しかし、現実にはやはり米国の一州であり、銃社会であることを忘れてはいけない。次の表2は「殺人」、「強盗」、「暴行」に関してのハワイと米国本土、そして日本の犯罪データを比較したものである。

表2 2016年ハワイ州・米国本土・日本の犯罪件数(10万人あたり)⁹⁾(筆者が作成)

	ハワイ州	米国本土	日本
殺人	2.5	5.3	0.7
強盗	69	102.8	3.6
暴行	128	248.5	11.9

これらの数値からもわかるように、ハワイ州は日本と比べると、殺人に関しては約3.6倍、強盗は約19.2倍、暴行は約10.8倍であり、決して治安が良い所ではない。「ハワイは治安が良い」という言説を鵜呑みにせず、自己防衛が必要である。

「3. 日本語が通じる」は、おそらくハワイには日系人が多いので日本語が通じるイメージが定着したものと思われるが、交婚や他民族の新たな移民が増えたことによって、ハワイ州における日系人の比率は年々減少している。次の表3は、年代別のハワイ

における日系人比率である。

表3 ハワイ日系人比率の経年変化¹⁰⁾ (筆者が作成)

年	ハワイ日系人比率
1960	32.1%
1970	28.2%
1980	24.8%
2020	17.8%

2020年の日系人は17.8%であるが、それよりも多い民族はフィリピン系で19%である¹¹⁾。さらに、日系一世や二世と異なり、三世以降は英語が主流言語で、日本語は外国語として興味のある人々が学ぶ言語となっている。ハワイ日系アメリカ人の聞き取り調査を行った村上によると、「家庭の外では日本語を使用する環境にないため、例えば週1回の学習では十分な習得が困難であり、大学における外国語コースを履修しても、コースで半ば諦めてしまう日系アメリカ人も少なくない」¹²⁾と実情を指摘している。ハワイの観光関係では、日本語が話せる人材を割り当てているのであって、必ずしも日系人全員が日本語を話せる訳ではないし、ハワイでは日本語が通じるというのは、今も昔も観光客を相手にした特定の場所だけである。

「4. 日本人の観光客だらけ」は、観光客を通した主観的イメージから来ている。確かにハワイは観光地として継続的に人気があり、そのため旅行社は効率的に集客できるようにパッケージツアーを開発した。海外旅行が自由化された1964年に販売されたハワイへの団体旅行は、約36万円であった。当時の平均月収が約6万円であったので、まさに高嶺の花であった。1970年代に入って、大型ジェット機の就航に伴って海外旅行の大衆化が進み、約14万円にまで下がって、頑張れば手が届く商品になり、新婚旅行などのパッケージツアーを中心にハワイ旅行は広がっていった¹³⁾。1994年の統計によると、日本人のハワイでの滞在は6.1日で、日本人来訪者の90%がパッケージツアーの利用者であった。パッケージツアーでは、現地の観光行動がマニュアル化され、宿泊先、航空の仕入れ、各種商業施設での販売方法や価格、日本語対応など、あらゆるものがシステム化されていった¹⁴⁾。このようなサービスは、旅先において不自

由を感じなく安心感を与えるが、反面、旅先でしか経験できない異質性を排除してしまうものである。その結果、旅行社が構築したツアーシステムに乗った大多数の日本人観光客は、ハワイの数日の滞在期間の間に、どこに行っても日本人だらけで日本語が通じる所という印象がすり込まれてしまう。次の表4は、新型コロナ前の2019年にハワイへ渡航した日本人の数である。

表4 2019年ハワイへの全渡航者数と日本／米国土／カナダの渡航者数¹⁵⁾ (筆者が作成)

全渡航者数	10,386,671
日本(割合)	1,576,205 (15.2%)
米国土(割合)	6,871,839 (66.2%)
カナダ(割合)	540,103 (5.2%)

表4から分かるように、一番多くの渡航者は米国土で66.2%であり、日本の15.2%を大きく引き離している。さらに、カナダの5.2%を加えて、北米という枠組で捉えると71.4%になり、圧倒的に英語圏の渡航者が多いのである。しかし今まで日本人観光客が感じた、日本人だらけで日本語が通じるという印象形成は、旅行社が構築した効率的にサービスを提供するためにマニュアル化された受け入れシステムと、日本人の多くはまとまった休みが取りやすいお盆や年末年始に集中するという、日本人観光客特有の行動様式に起因していると推察される。

IV. 本研修の内容

次に示したものが2019年度の研修の概略であるが、前述したように新型コロナの世界的な蔓延によって、直前に研修内容の変更を余儀なくされた。この変更は不測の事態への対応であり、本来の研修内容とは異なるのと、今後新型コロナ前の状況にもどることを想定して、ここでは本来の研修内容を議論の対象にしたいと思う。

①研修の概略：

＊研修の目的：教員を目指す学生を対象として、異文化を肌で感じることによって、多様性に関する感性を涵養する。さらに、英語でのコミュニケーション能力向上をはかる。

＊研修期間：2/23～3/8、2020(15日間)

＊研修場所：ハワイ大学マノア校(ハワイ州オアフ島)

＊滞在方法：ホームステイ

この研修は約2週間という短期プログラムなので、現地での授業、野外活動、ホームステイを通して、異文化理解により重点を置いた海外研修という位置づけである。詳細なプログラム・スケジュールは次のようになる。

②プログラム・スケジュール(2020年)：

2月23日(日) ホノルル到着→空港からホームステイ先へ

2月24日(月) クラス分けTest7:45－、英語授業 13:00－17:00

2月25日(火) Diamond Head Hiking 9:00－12:00、英語授業 13:00－17:00

2月26日(水) ハワイ大学 Campus Tour 9:00－12:00、英語授業 13:00－17:00

2月27日(木) Downtown Tour 9:00－12:00、英語授業 13:00－17:00

2月28日(金) Around 10:00－Conference & Graduation(他の学生との交流)
Around 14:00－15:00 Hula Lesson

2月29日(土) 終日Free

3月1日(日) 終日Free

3月2日(月) 学校訪問の準備 8:30－12:30、英語授業 13:00－17:00

3月3日(火) Around 9:00－12:00小学校訪問①、午後はFree

3月4日(水) 学校訪問の準備 8:30－12:30、英語授業 13:00－17:00

3月5日(木) Around 9:00－12:00小学校訪問②、午後はFree

3月6日(金) Around 11:00－12:00 Lei Making、英語授業 13:00－17:00

3月7日(土) ホームステイ先から送迎にて空港へ→日本へ出発

3月8日(日) 日本到着

基本、平日は半日の英語授業、半日の野外活動がスケジュールされている。特に、英語の授業では、日常会話というよりも、教育学部の学生で中学校教諭一種(英語)もしくは高等学校教諭一種(英語)の免許取得を前提としているため、英語で英語を教えるスキルを学ぶ授業内容を研修受け入れ先には要望し

た。研修受け入れ先であるハワイ大学マノア校は、ノンネイティブに英語を教える教授法のレベルは全米大学ランキングにおいてトップクラスである。米国の大学ランキングを語る際、多くの日本人がよく誤解しているのを見受けるが、米国大学のランキングは多種多様なものが存在する。現在は、イギリスのTimes Higher Educationが出している世界大学ランキングが文部科学省が取り上げたため、日本でも注目を浴びるようになってきているが、それ以前は、米国のランキングをみる際、米国内だけの大学をランキング付けした、Best College U.S. News Rankingsがマスコミなどでよく取り上げられていた。そのランキングでは、2022～2023年のハワイ大学マノア校は443校中166位となっている。この数値により、多くの日本人はこのランキングの指標の癖を知らないで、全体の上位約37%に位置する中堅よりも少し上の大学だと理解してしまう。しかしこれは大きな間違いである。全米教育統計センター(2012～2013年)によると、Accreditation制度のもと認定された米国の4年制大学は3,049校あると発表されている¹⁶⁾。Best College U.S. News Rankingsでは、この約3,000校からNational Universitiesとしてまずは443校を評価の対象として前段階で絞っている。故にここでの指標では、米国の全大学約3000校の内、ハワイ大学マノア校のランキングは上位5%の位置づけとなる。そもそも多くの日本人は、Accreditation制度というものを理解している人が少ないと思われる。米国の大学は、Accreditation制度という大学間の相互認定で大学が成立しているため、認定されている大学間であれば同じ単位として扱われるので、大学の名前による優劣は制度上存在しない。故に、トランスファーと呼ばれる、他大学への転学・編入も米国ではごく一般的に行われているのが実情である。このように米国の大学ランキングは単純に学力の優劣をあらわしたのではなく、一定の人々による「評判」や「満足度」などを主な指標にしている場合が多く、米国人が大学に進学する場合にはランキングよりも、自分が専攻したい学部の有無、授業料や奨学金などの経済的な理由、大学へのアクセス等、実利的な要因で決めることが多い。また、自分が思っていた大学と違うと思ったなら、他大学へトランスファーしてしまうだけのことである。米国における各大学ランキングの指標を十分に

理解せず、単に日本型の偏差値ランキングのように扱うのは大きな誤解を生じさせてしまう。米国大学の特徴やランキングについては、別の機会にでも詳細を言及することにするが、要するにハワイという土地柄、多様な移民の流入が多いため、ノンネイティブに対する英語習得や異文化理解に対して実践的な教育が行われてきており、異文化理解や英語習得の教育レベルが高く、本プログラムの研修地としては理想的な地であるといえる。

また、本研修の特色として、教育学部の学生を念頭に置いているので、現地の小学生との文化交流を2回ほど、次の小学校において計画した。

＊ Queen Kaahumanu Elementary School (Urban Public)：徒歩20分ほど

対象学年：Kindergarten、1st、2nd

グループ A (Grade K)：

グループ B：(Grade 1)：

グループ C：(Grade 2)：

＊ Mid-Pacific School (Private School)：バス20分＋徒歩10分ほど

対象学年：K—6の中でいずれか

グループ A (Grade 1)：

グループ B：(Grade 2)：

s グループ C：(Grade 3)：

そして、次が研修の様子の一部である。



ハワイ大学マノア校構内



ハワイ大学マノア校構内



ハワイ大学マノア校の図書館内



ハワイ州会議事堂前



ハワイ州会議事堂内



ホノルル市庁舎内



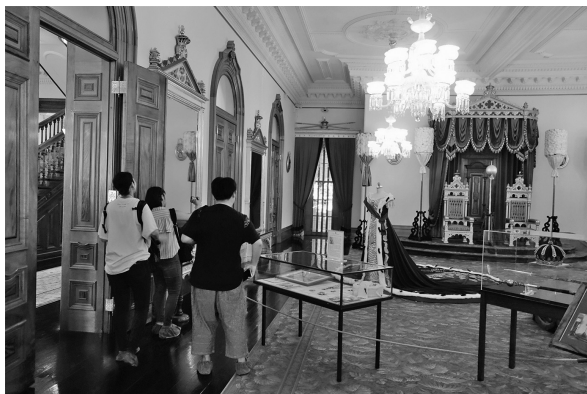
史跡訪問



史跡訪問



ハワイ文化の授業風景



イオラニ宮殿訪問



KCCファーマーズマーケット(週末)



英語の授業風景

また、滞在方法はホームステイであるが、事前にアプリケーションを書いてホームステイ先とマッチングしている。位置的には学校まで市バスで1時間以内で通える範囲ということが条件で選別され、滞在中は朝食と夕食が提供される。次の写真が典型的なホームステイ先の外観であるが、観光客などいないローカルな住宅地である。



ホームステイ先の家(一例)



ホームステイ先の周辺(一例)

最後に事前ガイダンスに触れておきたい。事前ガイダンスは、海外研修の重要な位置づけである。渡航手続き等実務的なことに対処する面もあるが、このガイダンスを通してどれくらいの問題意識を持つことができるかによって、研修の成果が変わるといっても過言ではない。現地に対する歴史・文化・慣習等の事前の知識がなければ、自ずと理解は浅いものになってしまう。そのため限られた時間ではあるが、次のようなガイダンス・スケジュールを準備した。

③ガイダンス・スケジュール：

- 第1回…旅行社説明(ホームステイ申込書記入、パスポート、保険、ESTA等の確認)
- 第2回…健康安全の手引き(健康安全センター説明)
- 第3回…研修全体の確認としおりの作成について
- 第4回…ハワイの歴史と文化
- 第5回…学生自ら調べた留学先に関する情報を発表し共有する①
- 第6回…学生自ら調べた留学先に関する情報を発表し共有する②
- 第7回…現地学校訪問準備①

第8回…現地学校訪問準備②

第9回…現地学校訪問準備③

第10回…しおりの作成①

第11回…しおりの作成②

第12回…ホームステイの心得

第13回…海外における危機管理と自己管理

第14回…しおりの完成

第15回…旅行社説明(出入国関連、保険証、ホストファミリー先情報等、出発前の確認と質疑応答)

V. おわりに(今後の課題)

2019年度に第1回目を実施してから、その後新型コロナウイルスの影響で実施ができなかった本海外研修であるが、前回の経験は今後のプログラム内容を検討する上で大いに参考になっている。特に、今後の研修にあたり、「半日の英語研修」、「ホームステイ」、「文化的な野外活動」、「現地小学生との交流」は継続していきたいが、参加人数や現地の受け入れ側の諸事情によって多大な影響を受け不確定な部分も多いので、絶えず状況に即して柔軟に対応し適宜改善することが必要だと痛感している。そして、当面の大きな課題としては次の2点が挙げられる。

1. 未だ現地に残る新型コロナの影響
2. 参加費用の高騰

出入国におけるPCR検査や公共施設におけるワクチン接種証明書の提示は、日本とハワイ双方においてすでに廃止されており、ハワイへの観光客の数もかなり回復してきている(2023年8月時点)。しかし、本研修活動の一環である「現地小学校児童との交流」は、訪問先が教育機関であるがゆえに未だ外部の人々の立ち入りを制限している可能性がある。新型コロナウイルスが蔓延する前の2019年度においてさえも、複数の現地小学校へ訪問の可能性を打診したところ、PTAの同意が必要ということで訪問校を探すのにかなり苦労した。現地小学校への訪問ができない場合、それに変わる活動を模索する必要がある。

前回実施してから約4年が経つが、その間に米国ではインフレが進み円は安くなり、日本人がハワイへ渡航するには不利な状況となってしまった。さらにそれに拍車をかけたのが燃料費の高騰で、航空運賃がかなり高くなってしまっている。このような状

況では海外研修に参加意欲がある学生でも、金銭的に諦めなければならない者もでてくる。そして、参加人数が少ないとプログラム・コストの共通部分を少人数で頭割りするため、参加費用が上がってしまうという、まさに負のスパイラルにはまってしまう。2019年度には参加学生は6名であったが、プログラム内容を充実させるためにも、理想的には少なくとも10名程度の参加者がほしいところである。他大学では、積極的に海外研修に学生を参加させるということで、給付型の支援金を出すところもある。本学においても、制度として何らかの手厚い支援体制が整えられることを切に望むものである。

注

注1 米国社会への同化圧力に関してゴードンは、「アングロ・コンフォーミティ」、「メルティング・ポット」、「文化的多元」という3つのイデオロギーを指摘している。アングロ・コンフォーミティは、1776年にイギリスの植民地から独立を宣言して米国が築かれたことと深く関わりがある。それ故アングロサクソン優越主義と強く関連しており、日本語で表記される場合、「イギリス文化優位論」と表される。新参入者である移民は、アングロサクソンの価値観に基づいて、イギリス化することが要求された。言語は英語を使い、文化や社会様式もイギリスを手本とするものである。

文献

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構, 「2020(令和2)年度日本人学生留学状況調査結果」p.3(2022).
- 2) 日本経済新聞, 「留学生回復へ政府の策は 日本、学生の『内向き』突出」
<https://www.nikkei.com/article/>
(閲覧日2023.10.12).
- 3) 文部科学省, 「高等教育を軸としたグローバル政策の方向性」
<https://www.mext.go.jp/content/20220913-mxt>(閲覧日2023.7.11).
- 4) 加藤優子, 「留学によって育まれるグローバル人材の要素についての一考察」『仁愛大学紀要人間学部編第13号』p.53(2014).
- 5) Ohana Hawaii, 「ハワイは『多様性』ナンバーワンの州」
<https://hanachablog.com/hawaii-asian-population/>(閲覧日2023.6.28).
- 6) 同上, (閲覧日2023.6.28).
- 7) 文部科学省, 「国際教育の意義と今後の在り方」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou(閲覧日2023.10.12).
- 8) Piko Aloha, 「2022年の日本人によるハワイ旅行者数と傾向まとめ」
<https://pikoaloha.jp/blog/hawaii-vacation-japanese-travellers>(閲覧日2023.6.18).
- 9) Hawaii Lifestyle, 「ハワイ州・アメリカ本土・日本の犯罪状況を比較」
<https://hawaii-lifestyle.com/charm/public-order>(閲覧日2023.6.30).
- 10) 中鉢奈津子, 「ハワイ日系人社会の特徴」『外務省調査月報No.4』p.35(2007).
- 11) 前掲書⁴⁾(閲覧日2023.6.28).
- 12) 村上和賀子, 「ハワイ日系アメリカ人の生き方」『中央大学人文科学研究所』p.106(2019).
- 13) 山川拓也, 「ハワイへの日本人観光パッケージツアー商品の生産と消費に関する一考察」『広島文教グローバル』pp.51-57(2017).
- 14) 中新田育子他, 「ハワイにおける日本人観光の展開と変容」『宮城大学事業構想学部紀要第1号』p.91(1998).

- ¹⁵⁾ Hawaii Tourism Authority, 「2019 Annual Visitor Reseach Report」
<https://www.hawaiiitourismauthority.org/media/5062/2019>(閲覧日2023.6.15).
- ¹⁶⁾ Education USA Tokyo, 「アメリカ大学・大学院留学の基礎知識」
<https://educationusa.jp/abc/>
(閲覧日2023.7.11).